

# 編集 後記

八月最後の週、7/8号の校正作業にはいりました。本号は新たな執行部で出発した日本生理学会の特集号という構成になりました。金子会長の巻頭言にはじまり、常任幹事会議事録、評議員会、総会の記録が掲載されています。新たな会則、動物実験指針、予算/決算情報も含まれており、会員各位に生理学会の台所から未来まで眺め、新しい生理学会の戦略を考えていただける良い機会だと思います。すべての学問分野はその深化にとともに、細分化され専門化されるのは当然の成行きであります。私には生理学が生体の機能を追求して行く限り消滅することはないと楽観的な気持ちがあります。しかし生理学者が「機能の追求」を停めてしまい、この物質があればこの機能だといったパターン認識を「機能の追求」と勘違いし、物質存在のサインを検知することのみ走ってしまえば、生理学は消滅する虞れは感じます。一方、生化学者のうちにも「この物質の存在はどのような生理機能と結びついているのだろうか。そのダイナミックスはいかなるものであろう」というモチベーションが生じたり、形態学者のうちに「この形態変化の意味する機能上の意味はなにか？ある

いは形態変化の時間的なものと生理機能の関係は」との疑問が生じた場合、「生理学」は生成していると楽観しています。金子会長の「生理学の復権を！」の呼びかけに応じる戦略として次世代をになう学生達に「パターン認識ではない生理学」を理解してもらうことを思いつきました。ひとつの方法として色々な生理機能の認識は誰が何時行ったのかを生理学の歴史として教えるのはどうでしょう。私の研究対象としている唾液腺について言えば、唾液はルネッサンスの頃までは脳からの排泄物という認識でしたが、Stensenは唾液を大量に分泌する反芻動物の頭部を解剖して唾液の導管を見つけ、それが独立の臓器に繋がっている事を発見しました。この時以来人類の知識に唾液腺が加えられ、「唾液は口腔をうるおす機能を持つ」と認識されたのです。唾液の機能認識に変化があったわけです。自然現象の認識の変化により「新しい機能」が生理機能に加わることが私にとって「生理学の醍醐味」でもあります。本号には熊田先生の追悼が寄せられています。日本生理学会の巨星の研究室での日々思いを馳せ、御冥福をお祈りしたいと思います。(村上政隆)

\*編集執行委員

## 編集委員

- |                          |                        |
|--------------------------|------------------------|
| *岡田 泰伸 (一般生理) [編集・広報幹事]  | 佐々木和彦 (神経生理) [東北]      |
| 赤須 崇 (神経生理) [九州]         | *定藤 規弘 (心理生理)          |
| *入来 篤史 (感覚, 運動, 高次中枢)    | *渋谷まさと (呼吸・循環)         |
| *河西 春郎 (神経・分泌生理)         | 菅屋 潤壹 (栄養・代謝・体温) [中部]  |
| 川上 順子 (感覚)               | 関野 祐子 (神経化学)           |
| 北澤 茂 (運動, 認知) [関東]       | 高井 章 (平滑筋, 自律神経) [北海道] |
| *久保 義弘 (細胞分子生理)          | 辻岡 克彦 (循環) [中・四国]      |
| 窪田 隆裕 (腎・体液) [近畿]        | 美津島 大 (内分泌)            |
| 小泉 周 (感覚)                | *村上 政隆 (膜輸送)           |
| 小西 真人 (筋) [東京]           | 吉岡 利忠 (体力)             |
| *小山 なつ (感覚, 神経生理) [HP担当] |                        |

日本生理学会事務局：〒113-0033 東京都文京区本郷3-30-10 布施ビル  
TEL：03-3815-1624 FAX：03-3815-1603 (勤務時間10：30～18：30)  
E-mail：psj@qa2.so-net.ne.jp  
URL：http://wwwsoc.nii.ac.jp/psj/